第 11 号　昭和61年3月31日

文化財やまと

大和町文化財保護協会発行

七鈴五獣鏡

大和町指定文化財

口神路の伊勢神楽について

会長　野田直治

昨年九月、口神路白山神社の大神楽・伊勢神楽が奉納され、続いて一〇月には徳永多賀神社の大神楽・歌舞伎が奉納された。ともに久しぶりの祭礼で、たいへんな人気を呼び、盛大に行われたことは、まだわれわれの記憶に新しいことである。

このうち、口神路の伊勢神楽が町の無形民俗文化財として指定を受けた。祭礼の文化財指定は、昭和五一年明建神社の七日祭が岐阜県指定となったのが最初であるが今回は町制施行後の指定第一号というわけで、文化の高い町づくりをめざす町としてまことに意義深いものがある。

神路の伊勢神楽は、他に類を見ないほど独得の古雅な趣きが直感されるけれども、それがいつの時代であるか明らかでない。文献として現在残っているものは、天保一五年（一八四四）の「当社氏神白山大権現祭礼の覚え」があって、それに「芸神楽一組一六人」と記されているけれども、事実はそれよりもずっと古いと思われる。当地古老の言い伝えによれば、昔、小十郎という人が伊勢へ行き直接伝授を受けてきたといい、他所とは違って伊勢直伝であるといって、これを誇りとしている。現に「郡上の祭り」の著者寺田敬蔵氏もこの説を認めている。氏によれば、郡上の伊勢神楽はほとんどみな尾張系か三河系であるけれども、口神路のは、その系統には入らないといわれる。尾張系・三河系は芝居神楽ともいって、例えば「父の名は阿波の徳島十郎兵衛、母の名はお弓……」というような浄るりが入り、それに合わせて獅子が踊るというように、ドラマが入っているのである。これは明治初年地芝居が禁止され、郡上郡では八幡の朝日座（現在の殿町にあった）を除いて他はすべて上演禁止になった。それで役者は獅子頭をかぶって獅子舞として踊った。獅子舞なら許されたので、太閤記や忠臣蔵などのさわりの部分を獅子舞として踊った。これが明治時代に大流行した。これが三河系・尾張系の伊勢神楽である。

ところが口神路の伊勢神楽にはそうした浄るりとか歌舞伎が主流にはなっていない。ここが他所とは違う口神路独得の神楽である。古老たちが伊勢直伝と誇るのもおそらくこの点を指したものであろう。今回、町の無形民俗文化に指定された理由の一つもこの点にあったと思われる。

では、その伊勢神楽とは、どういう神楽であろうか。町の文化財としての特色はどこにあるかを、皆さんに御紹介したい。それは百聞は一見に如かずというように神楽の実際をご観覧願うに越したことはない。こうした考えから口神路区へお願いして、本会の総会に際して特別出演をしていただくことになったわけである。せっかくの好機会であるから、有効に見ていただくために、参考事項を一言書き添えて置く。

口神路区の伊勢神楽は「四つ獅子」ともいわれ以前は次のように奉納された。

一、悪魔払い
一、獅子　悪魔獅子・お鍬獅子・お菊獅子・洞入獅子
一、おかめ（若いおかめ）
一、市兵衛
一、川崎踊り
一、四舞（しまい）の段　おかめ（年寄りのおかめ）市兵衛・鬼・鐘馗

右の内、今回は時間の関係上次の三つを上演していただく。

㈠悪魔払い（役者一名）黒の風折烏帽子に水色の素襖（すおう）をつけて大刀を差して素足である。手に御幣と大刀を持って舞う。大刀は鋭い真刀である。

㈡川崎踊り（八名）編笠をかぶり友禅柄の着物を着て、赤と水色のしごきを左腰に結び端は垂らす。郡上踊りの古調川崎の原型を偲ばせるものがある。はやしことばに注目していただきたい。

㈢悪魔獅子（以下略）

嵯峨清涼寺と生身の釈迦

畑中浄園

昭和六〇年一二月一三日、大和町文化財保護協会の一行二三名は京都嵯峨の史跡探訪を行った。二尊院・厭離庵（ここは一般には公開されていないが前もって願い出ていた）を拝観し、小春日和のやわらかい光線をあびてなだらかな小路をくだると、間もなく清涼寺の西門の所に出た。

「きさらぎの中の五日（二月一五日）は鶴の林に薪尽きにし日（釈迦入滅の日）なれば、かの如来二伝の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺に詣でて　常在霊鷲山　など、心のうちに唱えて拝み奉る云云」という『増鏡』の序文を思い出しているうちに本堂（元禄一四年　一七〇一　再建）の前に立っていた。

清涼寺は一般に嵯峨の釈迦堂とよばれ、市民から親しまれている浄土宗の寺院である。この寺の前住職は、京都大学の教授で中国仏教史の大家故塚本善隆博士であった。円満な人格で、たびたびお目にかかりご高説を拝聴したことが思い出される。

当寺開創の発願者奝然は京都の人、藤原氏で、幼時に東大寺へ入り三論・密教を修めた。永観元年（九八三）弟子盛算ら六人を従えて、宋の商船に便乗して入宋し、翌二年宋の都汴京（今の河北省開封）に入り、北宋第二代皇帝太宗に謁し紫衣及び法済大師の号を与えられた。ついで五台山（山西省）に詣でた。五台山は古くから文殊菩薩の霊場とし信仰をあつめ、金閣寺・仏光寺など多くの寺院が建てられており、中でも清涼寺は五台山の奥の院の地位を占めていた。奝然がこの清涼寺に詣で深い感銘をうけたであろうことは、彼が帰朝後洛西の愛宕山を五台山に模し、五台山清涼寺の建立を発願したことでも明らかである。

奝然はなお、都汴京でインド渡来の釈迦像を拝した。この像は、インドの優填王が栴檀の香木で彫刻したもので、のちインドの宰相をしていた鳩摩羅炎が出家して西域の亀茲に将来し、さらにその子鳩摩羅什によって四〇一年（姚秦弘始三年）長安に伝えられたといわれる。羅什は有名な訳経僧で多くのインド渡来の経典を漢訳したが、なかでも現在読誦されている阿弥陀経の漢訳は名訳とされている。

奝然は皇帝太宗に願って、仏工張延皎・張延襲兄弟に命じて、雍熙二年（日本寛和元年　九八五）栴檀の木で模刻せしめ、永延元年（九八七）日本に請来したのである。帰国後彼は五台山巡拝の感激から、朝廷に願って嵯峨の愛宕山を五台山になぞらえ、もっとも感動を覚えた清涼寺と同じ名の寺を建立して、この釈迦像を奉安しようとしたが果たさず、入宋に同道した弟子盛算によって五台山清涼寺が建立された。

昔からこの釈迦像は「生身の釈迦」といい伝えられていたが、戦後その胎内から絹布製の五臓六腑・奝然入宋求法巡礼行並瑞像造立記・法華経・版画文殊菩薩像・中国銅銭一三二枚などが発見された。当時このことが紹介されると、仏教史・美術史・医学史などの学界に大きな衝げきを与えたことはなお記憶に新しい所である。また、絹製の五臓六腑が内蔵されていたことで「生身の釈迦」といわれてきたことが実証されたわけである。

寺僧の方の好意によって、内陣に入り、尊像を間近に拝むことができた。像は等身大で釈尊三七才の時の姿であるといわれる。すこぶる異国的な風姿で、印相は右手は肘を曲げて肩のあたりで五指をそろえて外に向けた施無畏印、左手は下にさげて五指を外にむけた与願印である。顔貌は彫りが深く、鼻すじがよくとおり、左右均整の衣紋の流れなどはガンダーラ様式（ギリシャ文化とインド文化の融合したいわゆるヘレニズム文化）である。全体に力強くかつ荘重である。この像が彫られた九八五年から、ちょうど一千年の歳月を秘めて、この尊像は何を私達に語りかけているのだろうか。再び合掌礼拝して堂を出た。つづいて霊宝殿内の幾多の国宝・寺宝を拝観して次の見学地落柿舎にむかった。

なお、当寺境内には文明一六年（一四八四）の銘のある鐘、多宝塔（元禄一六年　一七〇三）、阿弥陀堂（寺のあと文久三年　一八六三）・仁王門（安永六年再建）などがあるが、これらを拝観する

次の機会をまちたいものである。

見えなくなった「石盤かち」

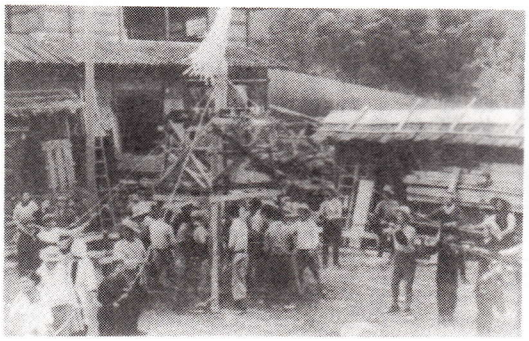
村井正蔵

私達が毎日生活している住宅を建てるとき、最初の大事な作業は、しっかりした土台（基礎）工事が必要なことは、昔も今も変わりありません。しかしながらこの基礎の作業も昔と今日では時代の流れと共にその工法が変わってきました。

もう二、三〇年間も見たことのない家の基礎作り「石盤かち」（台石の据え付け）について書いて見ました。石盤石を選ぶには、天場が平面で安定度の良い石で、かなり大きさもあり、大人四人でやっと担う事の出来るくらいのものが使われ、家の役柱の根元を支える台石として用いられたのでした。この石の数は建てられる家の大きさによって違いますが、三〇個から五〇個ぐらいは必要だったようです。

この台座石を突き固め、安定させる作業を石盤かちといいました。先ず地馴らしが終わり、大工さんの地割りが出来ると、役柱の当たる所に、この石を運び仮据しておきます。

大工さんはこの石を固定するために次のような準備をされました。生木の赤松（主に）で長さ四米余、直径二五センチメートルくらいの丸太を八角に削り、株元六〇センチメートルくらいの所で四方にボートを揉み、クサビを打ち込んで、それより下は山藤などでタガを作り、打木（松丸太）が割れたり、もせもせになるのを防ぐためにぎっしり藤タガで覆ったのです。またこの丸太の先には一メートル五〇センチくらいの長さの角棒を打ちつけ、頂上に御幣を、少し下には一メートル余りの鉋屑（別によい材料で作ったもの）数十枚を房状につけ、丸太の上部から少し下がった所を細くしてクモ縄という紐を数本つけたものでした。このクモ縄は打木を立て作業をする時に垂直を保ち、どちらにも倒れないためと、胴打ちに力を加える二重の役目があったのでしょう。また丸太の根元には太い縄が二〇本余もつけられて八方からこの縄につかまり、これを同時に引き揚げて、丸太の木口で石盤石を二、三〇回も突き沈め石を安定させたものです。



家の中心である亭主柱の所にはやぐらを組み立てられた所もあり作業の初めもここから始められたものです。親せき・知人・相人など大勢の人達が集まり、お神酒を上げ、家の建つことの喜びと、いつまでも安泰でありますことを祈念しながら、木遣り歌の調子にそろえてドンドンと進められたものです。

作業中に打木を倒したりする事があると危険であり、また縁起でもないことから、作業が完全に終わるまで打木は倒さないことになっていたそうです。このように大勢の人達の労苦と協力、そして祈念によって百年の礎石が据えられ家が建てられたのです。

当時歌われていた木遣り歌を一、二紹介しますと、

〜ハァー同行衆よご相人よー
　毎度の頼みで気の毒じゃー
　ハァー気の毒なれど手を締めて
　一度にドンドンと頼むぞえー
〜ハァー弁慶が弁慶が
　色が黒くて弁慶なら
　ハァー鍋や茶釜もみな弁慶ー
〜ハァー西行が西行が
　初めて東国にくだるとき
　熱田の宮で腰をかけ
　ハァーこれほど涼しい宮様を
　誰が熱田と名をつけたー

（大工さんより聞いた話）

歌集「しのわき」より

土松新逸

遠き日のいくさ語りも夢のごとぶし明るきしのわきの山

小みちの曲り角毎に在します地蔵菩薩も雑草の中なり

冬空に枝をはりたる樹々たちに遠き歴史をきかんと立ちぬ

世の移り里の変わりを見下ろして老杉は今日も夕陽に立てる　妙見

遠き世のひとらが建てし五輪塔夏草原にひそと並べる　白雲山

遠き世のたくみがつくりし鈴鏡のふれば現つの音たつるなり

城跡の松の緑に吹く風の音かすかなり語るともなく

東林寺史跡の清掃によせて

加藤　一男

昨年十一月十日、東氏ゆかりの史蹟東林寺跡の清掃を行った。幸いこの日は、町内一斉清掃日であったので、篠脇文化顕彰会、元兼地区十一名の手で、境内地と思われる約十アールの草刈りと、土橋一つを架ける事ができた。それに五輪塔の一部と思われる石一個を発見した。

東林寺跡は、牧元兼部落の東端にあり、内屋敷、北戸の字名が残っている。

享徳二年（一四五三）東氏によって建立されたもので、初代住職は常緑の妹素順尼、二代目も常緑の妹宗雲尼であったと伝えられる。

応仁二年（一四六八）美濃守護代斉藤妙椿が篠脇城を攻略の際兵火により焼失し、住職等は寺宝を池に埋め難をのがれたといわれる。焼失から二百九十余年後の宝暦九年（一七五九）に懸仏等が発掘されているので、寺の再建はなかったと思われる。

宝暦九年元兼部落の住人彦右衛門（現世帯主日置幸夫さん）が不思議な夢のお告げにより、桜の大木の根元から発掘した懸仏六体と和鏡二面が、下栗巣の応徳寺（住職武田信康さん）に出土記録と共に保管されている。

昭和五十八年二月二十五日岐阜県重要文化財に指定された。

境内にあった五輪塔三基は、昭和十年村人達によって、流水保育園の東側にある無縁仏境内に安置し、供養されている。また昭和五十三年ほ場整備のおり、梵字のきざまれた宝篋印塔の一部と思われる石が発見され、現在大和町役場に保管されている。

寺跡付近見取図の如く、御堂は一段と高い台地（東西約六メートル、南北十メートル）にあったと思われ、十数本の椿の木にかこまれており、なかには一かかえもある大木もある。その右側下段に五日月ぐらいの月型をした池跡がある。一面「ショウブ」が密生しており、その間をぬって清水が流れている。昔から池とよばれている所で、東林寺の池であることは間違いない。

その昔尼僧達が手向の水をくみ時には山端から出る月影をこの池にうつし風流をたしなまれた事であろう。

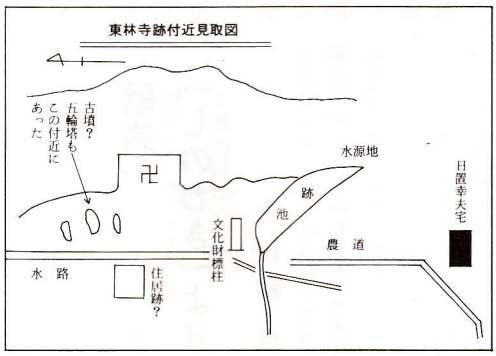
昔からこの池に東林寺の寺宝が埋められていると伝えられているが、この寺宝とは、宝暦九年に発掘された懸仏等のことでなかろうか。池にはまだほかに宝篋印塔等が埋没しているのでなかろうか。今年は、池を重点に清掃を行いたいと思う。

御堂のあったと思われる台地の下段左側の平地一帯は墓地であったと考えられる。そのあかしにはこの付近に五輪塔が三基あった。また死人が埋葬してあると伝えられている。埋葬したと思われる長さ三メートル、巾二メートル程の土盛りが三か所あるがそれでなかろうか。

一度発掘してはと、地元の声もあるが識者のご一見をこう。

寺跡の前方に三十アール程の平地がある。ほ場整備を行った際土質の違った穴跡が所々にあったと地元の人の話であり、住居はこの付近にあったのではなかろうか。かなり広い庭園をかまえていたと思われる。

昭和五十三年元兼地区のほ場整備のおり、池等も地域に編入できたのであるが、地域の人々が文化財に対する御理解により、貴重な史跡が残された事は誠に幸いである。今後出来る事なら五輪塔等もこの地に復帰し、史跡の保存につとめたい。



宗祇ざくらとこけんみち

木島　泉

（注）兼頼から神路へぬける山道を馬坂といい、むかしキツネに化かされた人の話をきいたことがあります。ある人が、酒に酔って、馬坂の峠を越えようと夜おそく歩いてくると、道ばたで若い女が苦しんでいます。はて、きのどくにとそばへ行くと、女は、

「くるしい、お腹がいたい、せなかをさすってください。」

とたのみます。美しい女に弱いのは男の常、さっそく背中をさすったり、腹をなでたり、いっしょうけんめい介抱しました。

そのうちに、夜が白みそめて、人が通りかかります。

「おい、なにしてござるんじゃ。」

気がついてみると、道ばたに転がっている丸太ん棒を一心になでさすっていたという次第。

今の馬坂は自動車が通れるし、このごろはキツネにもあまり化かされなくなったから、馬坂のキツネも人をからかうこともありません。

その馬坂峠の入口に近く、やはり神路へぬけられる旧道が今も少し残っていて、俗に「こけんみち」と呼ばれています。今は廃道同様になって顧みる人もないようですが、昔の道のそこここに石垣の崩れや休憩用の石などが置かれています。

兼頼橋に近く、古道川を少しさかのぼると宗祇ざくらとよばれる老木が一本川岸にあります。こけんというこの道はたぶん東常縁と飯尾宗祇の古今伝授にからまる「こきんみち」が訛ったものではないでしょうか。

こけんみちの峠のまん中は、すこしくぼみ、両がわがけずれています。ここは、こけくら峠といって、昔はトンネル（といっても小さいもの）だったと、井上利道さんが教えて下さいました。

今から約五〇〇年前、古今伝授を終えた宗祇を送って、常縁はこの山道を越え、小駄良川のほとりまで歩いたことでしょう。

そのころは、今のように整然とした杉林ではなく、丈の低い雑木に包まれた山道だったと思われます。道の辺りには、今も清らかな山水が流れ出ています。ここからは遠く西根や内ケ谷の山々も見渡せます。常縁が、

炭がまのけぶりはそらに立ちのぼり風なき山に雪の積もれる

と詠んだのも、たぶんこのあたりからみた西の山々の炭焼の煙だったのでしょう。

宗祇ざくらとよばれる桜の老木も、今はほとんど枯れかけていて成すすべも知りません。しかし、この桜が宗祇ざくらと呼ばれることは、実はたいそう深い意味をもっており、大切にのこして行きたい木なのです。（大和公報一二月号参照）

また大間見には宗祇清水があり宗祇がうたを詠んで、水を湧き出させたという　いい伝えが残されています。東氏が遺した数々の歴史の中で、古今伝授にまつわるこれらをぜひ後世に伝えたいものです。

（注）字古道地内の地名

郡上街道の名残り

小池久江

郡上の文学碑の中に、儒学者頼山陽が、美濃の門人の家に滞在中郡上八幡に遊んだ折、遠く加賀の白山を望み、眼下長良川の清流に感動して詩を作した　といわれるその石碑は、箱坂地内国道添いにある。足を止めて見たことはないが、碑の事を知ってから、「遠く白山を望み」と言う処に疑問符があって、心の隅に残っていた。

金網越しの碑を一度確かめたいと思いながら、その折りのないまま今日に至っている。

毎年、六月の文化財見学は、雨で大変でしたが、この度は好天に恵まれ、総勢四十名、満員バスの八幡町巡りはいい一日でした。

那比新宮への途中、法伝の滝を見学する。相生法伝橋を右に見て通りすぎたすぐ左上の山、国道から十メートルくらい登った所に、ひっそりと落ちる滝が、「法伝の滝」という。名前は聞いていましたが見学は始めてで、いい機会に恵まれたことを嬉しく思う。

登りつめた滝の傍らに細い道が少し曲って行き止りになっている。この道が、郡上街道の名残りと聞いて感動。その昔の信仰の道であり、上保、越前、又白川街道と、白山に登る信者に依って踏み固められた道であろう。ここに一時を憩い、滝の水で喉を潤し、又滝に打たれて修業した信者もあっただろう。今水は少いが静かないい滝である。

戦国時代には、白山参拝者も多く、この山深い郡上街道にも関所が設けられ、関銭を取る程通行人が多かったことも聞く。郡上は白山信仰の本場だったのだろう。

今ひっそりと落ちる滝に、さまざまな思いを馳せながら僅か残っているその道を歩いてみる。

眼下木の枝越しに清流を見ることが出来、ここからは遥か遠い山なみを望むことは出来ないが、こ

の郡上街道が箱坂峠にと続いていたのだろうと想像すると、心の隅に残っていた疑問符、頼山陽の詩の意が納得出来る。

滝の脇岩にからまる様に、小さな一、二輪の白い花を見る。「ていかずら」と教えてもらう。捩れた花片に香が優しかった。古人は「まさきのかずら」と呼んだそうで、若い葉は少し大きくてまさきによく似ているとか、

「ていかずら」いい名前だなあ－何時の頃からこう呼ばれる様になったのだろうか。「ていか」「定家」歌、書、織物とそれぞれ人は異なるかも知れないが親しみのある名前である。

静かな滝の音をあとに、それぞれの想いを語り、下り道に足元を庇いながら次の見学場所にと向う。

清滝にていかずらの名を聞きてわずかに残る郡上道踏む

昭和六〇年度 事業報告

五月一五日　役員会
昭和六〇年度総会並に記念講演会開催について。文化財見学について、その他
五月二六日　総会於町民センター
昭和五九年度事業報告・収支決算の承認　昭和六〇年度事業計画　収支予算の承認
。記念講演　東氏出身の五山禅僧について　虎溪山永保寺住職　中村文峰師
六月七日　文化財見学　八幡方面
法伝の滝・那比新宮・慈恩寺・小野八幡神社（参加者四一名）
九月一四日　役員会
秋の文化財見学について　郷土芸能の保護について口神路白山神社神楽　応徳寺雅楽
一一月三日～四日　町民祭に参加
一一月一二日～一三日　京都文化財見学　建仁寺　南禅寺　二条城　二尊院　厭離庵　清涼寺　落柿舎　天龍寺（参加者二三名）
二月一二日　役員会
昭和六一年度総会開催について
「文化財やまと」第一一号の原稿募集について　文化財見学について
三月三一日　「文化財やまと」第一一号発行

日置　智恵子

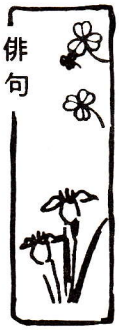
娑々迦とか瀬音かわらぬ岸に生う
宗祇桜の枯まさりいる
浅春の光ふゝみて窓際のボケの蕾のいまはぜんとす

矢野原　幸子

しのわきの城跡雪解（ゆきげ）のはざまより
節分草がふるふると咲く
何ならむ薄紅（くれない）のものゝ芽のいくつかへ陽がさんさんとふる

桑田　静子

人だちもひけてふけゆく夜のしじま洗ひ上げたる皿にぶくてる
雪割りて掘り来しねぎの水々し
刻む手もとにしるき香のたつ



田中　裕

孫去りて急にさびしくこたつ酒
せりの芽のまた小さきを灌ぎけり
ほろほろと香り楽しむふきのとう
てん刻を終わりて気づく春時雨
忌日はや三月となりて阿弥陀経
阿弥陀経つまずき称う春時雨
仕事終えまず妻の位はい春の花

有代信吾

嵯峨野散策
柿熟れし嵯峨野の辻の茶屋古りぬ
花みづ木実のこぼれいて嵯峨野道
秋蝶のもつれて温し厭離庵
竹林をうちて遠のく京しぐれ
空分かつ銀杏黄葉（もみじ）の建仁寺

日置　繁

老鶯や一と葉紅づくななかまど
夜網舟叩く川原に炭火たつ
仄暗きともし火点す花茗荷
樹下暗く野帳ぬらすや山時雨
待つとなく歩度ゆるめけり雪女郎
海苔網が海すき上げる鳥羽の浦
雪原に窪み生れつゝ雨となる

横枕　千代子

四国路の同行二人萩こぼる
春先の影踏み合いて子等笑う
クロッカスはやばやと庭彩りぬ
うたたねを楽しむ留守の春炬燵
せせらぎの春を寒しとつぶやきぬ

井俣　初枝

雛飾り逝きし子のことふと思ひ
今年また亡き子に買ひし雛飾る
月遅れなる山里の雛飾る
どの顔も同じ笑なる土雛
土雛母に貰ひて嫁ぎ来し

桑田　和子

「朴の花」
土蔵を出でし明るさ梅匂ふ
磴のぼる一歩一歩に春の風
参道の苔にしみゆく虎が雨
夏霧に高原の空なかりけり
ふる里に来しこと朴の花の香に

ー次号原稿募集ー

一、見学記　八〇〇～一五〇〇字
二、短歌　三～五首
　　俳句　三～五首
三、文化財に関する随筆　八〇〇～一五〇〇字
原稿〆切　昭和六二年二月末

昭和六〇年度

会員名簿

（順序不同）

（氏名）（役名）（電話番号）

《剣》

山下運平（顧問）　二四〇六
国枝　貞雄　二二九三
日置　照郎　二〇七二
高橋　義一（常任理事）　三七九二
高橋　明（理事）　二四八八
加藤　文蔵　二八〇二
田中　裕（理事）　二三〇〇
池田　憲三　二二八二
畑中　定夫　二一六八
小池　久江（理事）　二五七六
青木　卦二　二三九二
畑中　康蔵　三五〇七
河合　俊次（理事）　二二四六
河合　芳江　二二四六
河合　恒　二三五八
加藤　正恵　二一〇七
佐藤　光一　三二〇一
日置　智夫　二七三〇
河合　芳英　二三〇四
山下ふみゑ　三二二七

《大間見》

野田　直治（会長）　二一八五
野田　茂（理事）　二二八五
青木　新三　二四三六
村井　正蔵（監事）　二三二三
池田　恒純　二八七九
野田　英志　二二八五
日置　繁　二二五四
大野　隆成　二二三〇
藤代　順行　三〇六〇
大野　紀子　二二三〇
清水　一作　三〇八六
小野江選量（理事）　二七二六
山下　直美　三九三八
小池八重子　二三〇九
藤沢五三郎　三一一六
日置　幸雄　二七七〇
池田　充彦　二七九六
池田　栄枝　三〇九〇
小野江　勉　二七二五
小野江利久　二七〇二
日置智恵子　三〇五二
松井　直（理事）　四〇八五
松井　博　三五〇八
松井　徳龍　三九九一
坪井　政夫　四〇九二
坪井　庄市　三五〇四
古田　忠　四〇九〇
井口　一男　四〇二〇
佐藤　秀夫　四〇〇一

《小間見》

平沢　勤　三九三七
島崎　英二　三〇三七
田代　俊雄（理事）　三九六五
田中　吾一　二五四七

《万場》

畑中　浄園（副会長）　二四四一
畑中　真澄　二四四一
石神　堯生　二四一三
井俣　初枝　二七五八
筧　明代　二五三二
稲葉　春吉　二五〇三
黒岩きくゑ　二四六〇
桑田　和子　二四一九
井上　昌保（理事）　二五二一
桑田　渥見　二四四六
桑田　信夫　二四一三
黒岩　弘巳　二四五八
三島　秋男　二四六一

《徳永》

木島　観一　二〇二三
木島　洋女　二五九一
木島　泉（理事）　四一八二
土松　新逸（常任理事　会計）　二七三一
鷲見　玲子　二〇〇五
田中まさを（理事）　二〇六七
鷲見　おと　二一八九
直井すゞ江　三五九二
矢野原幸子　二〇七七
鷲見　ゆき　二二八九
畑中　文枝　二三八二
遠藤　賢逸　二一二一
渡辺　明夫　二六九五
木島　三郎　三五九〇
山内喜久子　二六一六

《河辺》

田中喜一郎　三四一〇
清水美佐子　二〇二一
清水　貞子（理事）　二〇五二
臼田とも子　二二五〇
清水　幸江　二〇一九
尾藤　元子　二一四七
横枕千代子（理事）　二三八九
前田　孝　二一〇一
岩谷ますの　三三六二

《神路》

森　忠敬（理事）　二〇八三
臼田　尊徳　三七三〇
和田　月男　三四六三
山田　真人　二一一四
羽生　清　二二七一
粟飯原高照　二三六二
土松　康二　二七二九
日置　貞一　二六六二
滝日　準一（理事）　二七〇五
土松　貞二　三九八〇
日置　昇　三六三六
遠藤　光平　三九八一
滝日　治　三四〇六
松森　益吉　三九二三
加藤　一男（理事）　二八七〇
日置　一朗　三六七四
遠藤　周一　二八九〇
田口　勇治　三九五〇
日置　元衛　三四一七
清水　定　二七一〇
粥川　溜　三三八七
本田　欣一　三一六〇
金子　徹　三四二六
斉藤　大門　三九二二
遠藤　米吉　三六三七

《栗巣》

筧　政之助　四一三一
島崎　増造（監事）　二二三六
増田　洋子　四〇四一
中山周左衛門（理事）　二七二八
武田　信康　二二八四
鷲見　豊夫　二七八八

《古道》

松井　弘雄（理事）　二七九五
細川　優　二八六一

《名皿部》

尾藤　由　三四三〇
有代　喜平　二二〇一
有代　信吾（理事　書記）　三七九一
森下　正則　三四一三
下広　茂一　三八九五

《島》

森藤　幸（副会長）　二七〇六
森藤　雅毅　二六八四
奥田　保次　二二三二
奥田　守　二三九〇
此島　広（顧問）　二四八〇
須甲　甚一　二六六一
山田　長次（理事）　三六四八
山田　昌枝　三六四八
森　数雄　二五五四
山田　良　二七九一
山田　良一　二七二八
松井　京二　三五八二
直井　篤美　二六二二

《落部》

若山　清　二八一七

《白鳥町》

玉井　秀夫　二一三三二一

（以上　一四三名）

昭和六一年度 事業計画

一、会議
総会の開催　四月二〇日
役員会の開催　四・六・九・一・三の各月及び臨時会
常任委員会の開催　随時

二、見学及び研修会
文化財に関する公演　口神路白山神社神楽
文化財見学　六月上旬美濃市方面　一〇月下旬～一一月上旬京都方面（一泊二日）
県本部研修会に参加
その他臨時文化財見学　湿地植物の移植

三、会報「文化財やまと」の発刊
B5版8～14ページ三〇〇部

昭和61年度予算計画

収入の部

項目	予算額
1, 前年度繰越金	53,577円
2, 会費	284,000
3, 特別会費	720,000
4, 補助金	43,000
5, 諸収入	3,000
合計	1,103,577
支出の部	
1, 会議費	100,000
総会費	60,000
役員会費	40,000
2, 事業費	810,000
研修費	740,000
会報発行費	70,000
3, 事務局費	45,000
消耗品費	10,000
通信費	20,000
旅費	10,000
その他	5,000
4, 負担金	140,000
5, 予備費	8,577
合計	1,103,577

昭和60年度会計報告

収入の部

項目	決算額
1, 前年度繰越金	38,226円
2, 会費	286,000
3, 特別会費	675,000
4, 補助金	43,000
5, 諸収入	4,246
合計	1,046,472
支出の部	
1, 会議費	38,680
総会費	23,300
役員会費	15,380
2, 事業費	773,005
研修費	733,005
会報発行費	40,000
3, 事務局費	41,210
消耗品費	8,650
通信費	6,910
旅費	8,700
その他	16,950
4, 負担金	140,000
5, 予備費	0
合計	992,895
差引残次年度へ繰越	53,577

文化財の愛護にご参加下さい

。文化財は、祖先が遺してくれた貴重な公共財産です。わたくし達の身近かな所にある数多の文化財を、みんなの力で護ってゆきましょう。

。大和町文化財保護協会が発足してから十一年目を迎え、会員は一四三名に達しています。なお多くの方々に参加していただいて本会の発展を期したいと思います。

。本会会員は、岐阜県文化財保護協会会員でもあり、会員には、岐阜県文化財保護協会発行の「濃飛の文化財」（年二回）「文化財美濃と飛騨」（特集）をお届けします。

本会会報「文化財やまと」をお届けします。その他、県本部主催の見学会、講演会、研究会に参加でき、文化財見学に参加できます。会員となるには会費二、〇〇〇円を添えて事務局（大和町教育委員会）へお申し込みください。

編集後記

◇暑い寒いも彼岸までといわれているように、長かった今年の冬もようやく去って、春の日ざしにさそわれるように、花前線も北上してきました。

◇会員の皆様のご協力で、会報第一一号をおとどけすることになりました。大へん興味深い原稿をよせていただいて有難うございました。

◇会員名簿も掲載しましたが、大和町には文化財に関心のある方が、まだまだたくさんおられると思われます。そうした方を一人でも多く会に加わってもらう努力も、保護協会の活動の一端ではないかと思われます。

◇六月には一日研修（美濃方面）秋には一泊研修（京都方面）も予定されています。みんなそろって出かけられますよう念じています。

◇暖かくなると何となく気ぜわしさを感じます。皆様のご健勝を願って後記にかえさせていただきます。（畑中記）

「文化財やまと」第十一号　昭和六一年　三月三一日発行　発行者／大和町文化財保護協会　代表者　野田直治　印刷者／白鳥タイプ印刷